

「生類憐みの令」で町を安全に

増山雄三

「生類憐みの令」で、犬や鳥類の保護を命じて動物愛護を強要し、「犬公方」と呼ばれ庶民に不信感を与えた、江戸幕府の第五代将軍「徳川綱吉（一六四六～一七〇九）」は、側用人である柳沢吉保の操り人形で、母桂昌院に頭の上がないマザコンである共に、贅沢で大寺院の造営などで、幕府の財政難に拍車をかけた人物だった。

それでも綱吉は、生類憐みの令で野犬がうろつく殺伐とした状況を改め、また服忌令により、血を忌み嫌う風習を作り、武力を重視する価値観を転換して学問を尊重し、文治政治による、天下泰平の幕を開け、元禄時代には経済が発展し、文化が興隆した。

そのため、この元禄期の治世下では、近松門左衛門や井原西鶴、それに松尾芭蕉といっ

た文化人を生み、好景気の時代だった事もあり「天和令」という優れた経済政策も執られ、それなりに高い評価も得ている。

とはいえ、綱吉の評価が低いのは、晩年期に頻発した不幸な出来事があった事で、先ず元禄八年（一六九五年）頃から始まる「奥州飢饉」、元禄十六年（一七〇三年）の「元禄地震と火事」、さらに、宝永四年（一七〇七年）の「宝永地震と富士山噴火」など、その外にも大火による災害が相次いで起った。

それらは、現代では治世の評価を左右するものとは考えにくいが、富士山の噴火で大穴をあけるなどの天変地異は、綱吉の徳がないために起った悪政の「天罰だ」と捉える風潮があったたからだと考えられていた。

将軍在職が歴代三番目となる、二十八年を務めた綱吉が、なぜ、これほど悪しざまに言われるのかという事について、学習院大学の高埜利彦教授は、荻生徂徠に師事した、江戸中期の儒者だった太宰春台が記した、「三王

外記」の影響があると指摘している。

そこには、「子どもがいないのは前世の殺生の報い」とか、「成年の生まれであるから犬を大事にするように」といって、綱吉は母とともに帰依した僧隆光に告げられ、生類憐みの令を出したとされるが、それによって「犬公方」のイメージが作られてしまったのだ」と高埜さんはいう。

また、「仮名手本忠臣蔵」も罪深く、赤穂浪士討入りを題材にした浄瑠璃は、一七四八年に大坂竹本座で初演され、歌舞伎でも人気の演目となり、今も討入りの十二月十四日前後には、テレビドラマで放送される。

それは、殿中で刃傷に及んだ、主君浅野内匠守の敵を討つ物語は御承知の通りだが、切腹を命じた將軍綱吉は、やはり損な役回りを演じさせられ、柳沢や桂昌院の関与も脚色され、「最悪の將軍」という事が、それによって既成事実化してしまった。

また綱吉にとってもう一つの不運は、水戸

黄門で知られる水戸光圀の存在で、光圀は生類憐みの令に抗議して、犬の毛皮を綱吉に送って直言したという記録が残っていて、「水戸黄門」のいくつかの物語の中で、綱吉は悪役を演じさせられてしまっている。

そんな話に見直しがされ始めたのは最近のこと、それは、ドイツ学者のベイリー博士が、一九九四年に出版した「ケンペルと徳川綱吉」で、生類憐みの令を「近代の社会福祉立法の先駆的なものだった」と、高く評価したからだった。

その中でベイリーは、綱吉と会ったオランダ商館のケンペルが彼に「綱吉は偉大で卓越した君主である。また、かれのもとで、全国民が完全に調和して生活している」と記している事を紹介しているが、綱吉としてもケンペルに会った時には、それなりに威厳を示そうと、虚勢を張っていたのだらう。

それでは、綱吉は二十八年の治世で、一体何を目指していたのかという事に就いて、「

先の高埜さんは、「平和の時代に見合った価値観の転換を図った」と見ているが、歴代将軍の施政方針にある武家諸法度改訂では、第一条には「文武忠孝を励まし、礼儀を正すべきこと」としている。

つまりそれは、それ迄の「文武弓馬の道、もっぱら相嗜むべきこと」を改め、時代を反映して、武家の第一は「忠孝」と「礼儀」と宣言し、武力で成り上がり論功行賞にあずかる主従関係は、家格を細かく定めて秩序を保ち、大嘗祭再興で朝廷の権威を尊重し、対立ではなく協調路線を敷いたのだ。

また、生類憐みの令では、犬や鳥類だけではなく、捨て子や行き倒れ、それに道中の病人などの弱者救済や保護も求め、死と血を穢れとして排する服忌令も定めた。

人を殺し殺されるのが当たり前である、戦国以来の常識を覆えようとした綱吉は、丁度、天皇の勅使と会う直前に、浅野内匠守の刃傷沙汰で、殿中松の廊下で血が流れた。

それを知った綱吉の目に、それは、いま彼が進めている朝幕強調路線と、服忌令を否定するものと思われ、彼の進めようとする、より一層の平和への道を、阻むものと映ったのに違いないが、恐らく残念だったろう。

ところで、野犬は当時、大きな社会問題になっっていたが、それは、捨て子を噛み殺すなど、人に危害を加える凶暴性が恐れられ、綱吉が目指す価値観の転換に反発する「かぶき者」などは、好き勝手にそんな野犬を斬り殺すなど、江戸の町は殺伐とされていた。

そして、綱吉が一六八五年頃から、次々に発した生類憐みの令は、こうした懸案を解決し、犬を食べる習慣もなくなり、今の東京都中野区役所一带は、十万頭を收容する保護施設の「お困い御所屋敷」も作った。

こうした、平和と安定の時代は、社会全体を豊かにし、農家の次男や三男は、戦乱に駆り出される心配がなくなり、農地開墾に励んで、生産量は大きく向上していった。

当時の日本の人口は、一六〇〇年の千二百万人が、一七二一年には三千百万人に増加したため、貨幣を使った商品経済も発展していき、井原西鶴や近松門左衛門らに代表される元禄文化が花開いてきた。

国内では、一六三七年から三八年にかけて起った、「島原の乱」で戦乱が終結し、東アジアでは、清が、九八一年に反乱を鎮めて中国支配を確立し、のち国内は安定した。

綱吉は、こうした国内外の情勢を踏まえ、より一層の平和を追求し、大名に作らせた「国絵図」を組み合わせて日本絵図を作成して、あわせ貨幣改鋳を行なう事で、より強力な全国統治に取組んでいった。

綱吉の死後、家宣が將軍になると、「生類憐みの令」はすぐに廃止されたが、同じような殺生である「鷹狩り」は、吉宗が八代將軍になった後まで、復活する事がなかったが、吉宗は綱吉に対し、敬愛の念を抱いていた。

令和三年五月